

3. 磯の生きもの

磯とは「岩」^{いそ}でできている海岸のことで、「岩石海岸」とも呼ばれます。

岩石海岸には、波で削られたいろいろな形の岩があり、その複雑な地形^{ふくざつ}を利用して様々な生きものがくらしています。

魚類

マアジ (アジ科)
Trachurus japonicus



夏には大きな群れをつくり、浅い岩場でよく観察される。

スズメダイ (スズメダイ科)
Chromis notatus notatus



背びれのつけ根^{とぐちよう}の白点^{とぐちよう}が特徴。岩の表面に産みつけられた卵をオスがふ化するまで守る。

メジナ (メジナ科)
Girella punctata



日本各地の磯で見られる代表的な魚。山陰海岸でも通年観察される。

カサゴ (メバル科)
Sebastiscus marmoratus



岩の上でじっとしていることが多く、観察しやすい魚。口が大きく、頭部に多くの突起^{とつき}がある。



ダイナンギンポ (タウエガジ科)
Dictyosoma burgeri



体は細長く、岩の下や海藻の根元に隠れていることが多い。

ベニツケギンポ (タウエガジ科)
Dictyosoma rubrimaculatum



ダイナンギンポより小型で、胸びれの上^{むな}にあるオレンジ色の短い帯^{とくちよう}が特徴。



ドロメ (ハゼ科)
Chaenogobius gulosus

磯の潮だまりや浅場でよく観察される。大きな口が特徴。

観察してみよう! ①

魚の「縦じま」と「横じま」

夏の磯場で観察できる「イシダイ」と「カゴカキダイ」。どちらもしま模様^{もよう}が特徴の魚ですが、しまの向きがちがいます。写真のように、泳いでいる姿では、イシダイが“縦じま”、カゴカキダイが“横じま”です。しかし、人と同じように魚も頭を上に向けて縦・横・右・左と名前がついているので、実はイシダイが「横じま」で、カゴカキダイが「縦じま」となるのです。



イシダイ (イシダイ科)
Oplegnathus fasciatus



カゴカキダイ (カゴカキダイ科)
Microcanthus strigatus

アナハゼ (カジカ科)
Pseudoblennius percoides



肉食性で小魚やエビなどを捕食する。
オスは交尾のための生殖突起をもつ。

クジメ (アイナメ科)
Hexagrammos agrammus



岩のすき間などでじっとしていることが多く、観察しやすい。よく似たアイナメ (右) とは、尾びれの形などで見分けられる。

ヘビギンポ (ヘビギンポ科)
Enneapterygius theostomus



アサヒアナハゼ (カジカ科)
Pseudoblennius cottoides



アナハゼと似るが、眼の上の飾り (皮弁) が特徴。アナハゼと同じ肉食性。

アイナメ (アイナメ科)
Hexagrammos otakii



体の色は淡褐色～茶褐色だが生息場所によって変化する。繁殖期のオスは体の色が黄色っぽくなる。

磯の潮だまりや浅場に多く生息する。繁殖期になるとオスは体の色を変化させ、メスに求愛する。



繁殖期のオス

観察してみよう! ②

あわ 濃いピンクにしま模様「キヌバリ」

体長7cmほどのハゼのなかまで、春先の浅い岩場で泳ぐ姿をよく見かけます。体の側面にある横じまの数は、山陰海岸を含む日本海側では7本ですが、太平洋側では6本と本数が異なります。幼魚の時は群れで行動しますが、成魚になると単独で縄張りをもつようになります。



キヌバリ (ハゼ科)
Pterogobius elapoides

チャガラ (ハゼ科)
Pterogobius zonoleucus



体の側面にある黄褐色のしま模様が特徴。夏の浅場で幼魚の群れが観察される。

ホシササノハベラ (ベラ科)
Pseudolabrus sieboldi



体の色は赤っぽく、成魚では背中側の白い斑点が目立つ。

オハグロベラ (ベラ科)
Pteragogus aurigarius



体の高さはやや高く、成長にともなって体の色も変化する。

ホンベラ (ベラ科)
Halichoeres tenuispinis



春先から冬にかけてよく観察される。成長にともなって性転換し、体の色も変化する。

ナベカ (イソギンポ科)
Omobranchus elegans



ひととき美しい黄色い体^{とくちよう}が特徴で、小さい岩穴^{かいがら}や細長い貝殻を巣穴にする。

ホシギンポ (イソギンポ科)
Entomacrodus stellifer stellifer



波あたりの強い浅い磯場^{いそば}に生息する。体の側面に細かい白い斑点^{はんとん}が広がる。

イソギンポ (イソギンポ科)
Parablennius yatabei



浅い岩場に生息する。頭部には分枝^{ぶんし}した皮弁^{ひべん}が2つある。

ニジギンポ (イソギンポ科)
Petroscirtes breviceps



体の側面の黒いラインが特徴。岩穴や空き缶から顔を出す姿が愛らしい。

コケギンポ (コケギンポ科)
Neoclinus bryope



浅い岩場や岩穴でよく観察される。頭部にあるコケのような飾り^{かさ} (皮弁^{ひべん}) が特徴^{とくちよう}。

ミノカサゴ (フサカサゴ科)
Pterois lunulata



大きな胸びれを広げてゆっくりと泳ぐのが特徴。背びれや胸びれなどのトゲ^さに刺されると危険。

ヒメギンポ (ヘビギンポ科)
Springerichthys bapurus



潮通しのよい磯場^{いそば}に生息する。体の側面にあるオレンジ色の斑点^{はんとん}が特徴。

キヌカジカ (カジカ科)
Furcina osimae



前側の背びれの一部が欠けたようにへこ^めむ。眼の上と後頭部に飾り^{かさ} (皮弁) がある。

キジハタ (ハタ科)
Epinephelus akaara



体全体にオレンジ色の斑点と背びれ中央の下側に黒色の斑点がある。山陰地方では「あこう」と呼ばれ、高級魚。

観察してみよう! ③

ダイナミックな闘争^{とうそう}「オオカズナギ」

体長は10cmほどの細長い魚ですが、大きく口を開け、互いに口を押しあてて力比べをするような形で激しく争います。この行動がよく観察されるのは6月から7月上旬で、彼らが繁殖^{はんしよく}を始める時期と重なるので、よりよい産卵場所^{さんらん}や繁殖相手をめぐる闘争なのかもしれません。



オオカズナギ (タウエガジ科)
Zoarchias major

(朝日新聞「生きもの通信 山陰海岸から (2014年7月8日掲載)」を参照)

観察してみよう! ④

大人と子どもで色も模様もちがう魚たち 「キンチャクダイ」・「コブダイ」・「ハコフグ」

多くの魚たちは、海の中での激しい生存競争を生き抜くために、さまざまな工夫をしています。ここでは、成魚（大人）と幼魚（子ども）で、体の色や模様が大きくちがっている魚を紹介します。

キンチャクダイの成魚では、黄色い体に鮮やかな青い縦じまが入っていますが、幼魚のときは黒い体に黄色いラインが目立ちます。

コブダイの成魚では、ピンク色がかった体と頭部の巨大なコブが特徴ですが、幼魚のときは鮮やかなオレンジ色の体に眼から尾にかけて白いラインがあります。

ハコフグの成魚では、黄色っぽい体とカメの甲のような模様が特徴ですが、幼魚のときは鮮やかな黄色い体に黒色の斑点があります。

(成魚)

(幼魚)

キンチャクダイ
(キンチャクダイ科)
Chaetodontoplus septentrionalis



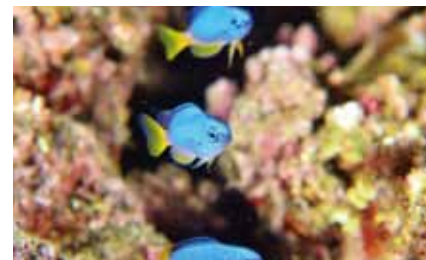
コブダイ (ペラ科)
Semicossyphus reticulatus



ハコフグ
(ハコフグ科)
Ostracion immaculatum



ソラスズメダイ (スズメダイ科)
Pomacentrus coelestis



鮮やかなコバルトブルーの体に黄色い尾びれが特徴で、山陰海岸では、海水温が暖くなる7月から10月にかけてよく観察される。

イトフエフキ (フエフキダイ科)
Lethrinus genivittatus



体はやや細長く、体に数本の黄色い縦のラインがある。夏以降に幼魚が観察される。

クロダイ (タイ科)
Acanthopagrus schlegelii



体は銀白色または暗い灰色で、大型の個体が浅場にも出現する。「チヌ」と呼ばれる。

オヤビッチャ (スズメダイ科)
Abudefduf vaigiensis



黄色っぽい体に黒い横じまが特徴で、初夏から秋にかけてよく観察される。

イサキ (イサキ科)
Parapristipoma trilineatum



体の側面の黒っぽいラインが特徴。初夏から秋にかけて、幼魚の群れが浅場で観察される。

ドチザメ (ドチザメ科)
Triakis scyllium



体の側面にある帯状のしま模様と黒い斑点が特徴。浅い磯場で、岩かげなどに隠れている幼魚が見つかる。

カニ・ヤドカリ・エビのなかま (甲殻類)

イワガニ (イワガニ科)
Pachygrapsus crassipes



山陰海岸の磯場で最もよく観察される。甲らの幅 (甲幅) は3cmほどで、背側には多数の横しわがある。



イワガニ



ヒライソガニ (モクズガニ科)
Gaetice depressus



甲幅は2~3cmほどで、平たい甲らが特徴。



イソガニ (モクズガニ科)
Hemigrapsus sanguineus

甲幅は2~3cmほどで、はさみ脚の黒い斑点と歩脚のしま模様が特徴。



イシガニ (ワタリガニ科)
Charybdis japonica

甲幅は成体で10cmほどになる。一番後ろの脚は泳ぐための遊泳脚。気性が荒く、強力なはさみではさまれるととても痛い。

カクベンケイガニ (ベンケイガニ科)
Parasesarma pictum



甲らは角張った四角形で、甲幅は3cm前後。海岸の転石の下にかくれていることが多い。

アカテガニ (ベンケイガニ科)
Chiromantes haematocheir



甲幅は3cm前後。オスのはさみ脚の紅赤色が特徴で、河口から陸域まで生息範囲が広い。

クロベンケイガニ (ベンケイガニ科)
Chiromantes dehaani



甲幅は4cm前後。オスのはさみ脚は強大で紫色っぽく、表面には小さなツブツブがたくさんある。アカテガニと同じように、生息範囲が陸域におよぶ。



クロベンケイガニ



ケアシホンヤドカリ (ホンヤドカリ科)
Pagurus lanuginosus

長い触角が特徴で、暗緑色の歩脚には多くの黒い斑点と長い毛がある。浅場の潮だまりなどでよく観察される。

観察してみよう! ⑤

貝殻コレクター「ホンヤドカリ」

ホンヤドカリのなかまの共通点は、右のはさみ脚が大きいことです。その中でも、ホンヤドカリは浅い磯場や潮だまりで多く観察できる最も身近なヤドカリで、しましま模様の触角と白いソックスをはいたような歩脚が特徴です。ヤドカリ(「宿借り」)は、その名の通り、巻き貝の貝殻を宿として使います。硬い貝殻の中に入ることによって、やわらかいお腹を外敵から守っています。宿として使われる貝殻の種類は実にさまざまで、山陰海岸のホンヤドカリでは30種類以上の貝殻が使われています。貝殻の好みはヤドカリのオス・メスや地域によってもちがうようです。



ホンヤドカリ (ホンヤドカリ科)
Pagurus filholi

(日本海新聞「何でも発見 たのしい観察13 (2011年9月8日掲載)」を参照)

ヤマトホンヤドカリ (ホンヤドカリ科)
Pagurus japonicus



触角と歩脚は赤と白のしま模様で、歩脚には短い毛が密生する。ケアシホンヤドカリやホンヤドカリよりも大型になり、サザエの空き殻に入っていることが多い。

ケブカヒメヨコバサミ (ヤドカリ科)
Paguristes ortmanni



左右のはさみ脚の大きさがほぼ同じで、歩脚などには多くの長い剛毛をもつ。浅い岩場で一年を通してよく観察される。

イソスジエビ (テナガエビ科)
Palaemon pacificus



体の側面の黒いしま模様と、はさみ脚や歩脚の黄色い斑点が特徴。海藻の中や浅い磯場の岩の上でよく観察される。

カメノテ (ミヨウガガイ科)
Capitulum mitella



爪のような頭状部とうろこのような柄が「亀の手」に見える甲殻類。潮のがぶる岩の裂け目などに群生する。

ウニ・ヒトデ・ナマコのなかま (棘皮動物)



バフンウニ (オオバフンウニ科)
Hemicentrotus pulcherrimus

大きさは4cm以下で小さく、トゲは短い。磯場で転石をひっくり返すと出合えることが多い。

イトマキヒトデ (イトマキヒトデ科)
Patiria pectinifera



イトマキヒトデの多型

身近な磯場で最もよく観察されるヒトデ。ふつう5本の腕をもつ星形をしているが、4本腕のざぶとん型や6本腕のものに出合えることもある。

ヤツデヒトデ (マヒトデ科)
Coscinasterias acutispina



名前のとおり、8本の腕^{うで}をもつことが多い。腕がちぎれやすいが、高い再生能力^{さいせいのかうりよく}をもつ。

ニッポンウミシダ (クシウミシダ科)
Oxycomanthus japonicus



海藻^{かいそう}のように見えるが、ウニやヒトデのなかま。たくさんの腕^{うで}をもち、オレンジや黄色など色彩^{しきさい}に富む。

巻き貝 (ウミウシのなかまを含む)・二枚貝・タコのなかま (軟体動物)



マヒトデ (マヒトデ科)
Asterias amurensis



腕の表面には小さなトゲトゲがある。イトマキヒトデより少し深い場所^{せいそく}にも生息する。

マナマコ (シカクナマコ科)
Apostrichopus japonicus



丸みを帯びた細長い体に、円すい形のいぼ^{しじょう}がある。市場では体の色によって、アカナマコ・アオナマコ・クロナマコの3種類に分けられる。

アオウミウシ (イロウミウシ科)
Hypselodoris festiva

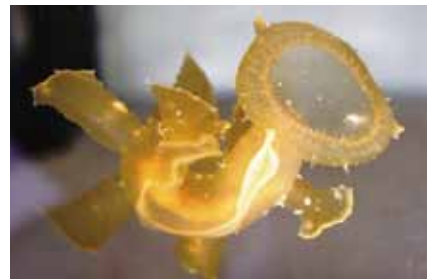
体長3cmほどで、青い体に黄色のラインや斑点^{はんてん}が目立つ。触角^{しゅつかく}や鰓^{えら}はオレンジ色。

シロウミウシ (イロウミウシ科)
Chromodoris orientalis



体長3cmほどで、白い体に黒色の斑点^{はんてん}が目立つ。触角^{しゅつかく}・鰓^{えら}・体の縁^{ふち}が黄色い。

ヒメメリベ (メリベウミウシ科)
Melibe papillosa



体長10cmほどで、褐色^{かつしよく}や灰白色^{かいはくしよく}の斑点がある。大きな口をもち、体をくねらせて泳ぐ。

クロシタナシウミウシ (クロシタナシウミウシ科)
Dendrodoris arborescens



体長4cmほどで、体の周り^{おうかつしよく}は黄褐色で波打つ。

サラサウミウシ (イロウミウシ科)
Chromodoris tinctoria



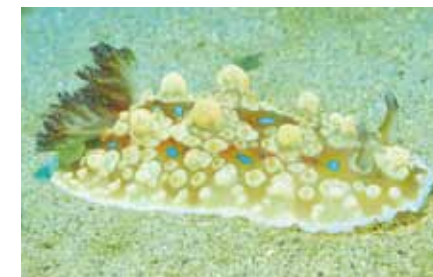
体長5cmほどで、白い体に橙赤色^{とうせきしよく}の細かい網目模様^{あみめ もよう}が特徴。触角^{とくちやう}・鰓^{えら}は赤紫色。

ハナデンシャ (フジタウミウシ科)
Kalinga ornata



体長15cmほどで、黄白色^{おうはくしよく}の体に、赤色や白色^{とつき}の突起^{しげき}が特徴。刺激を与えると、体から光を発する。

ミヤコウミウシ (クロシタナシウミウシ科)
Dendrodoris denisoni



体長5cmほどで、大きささまざまな丸いイボ^{いぼ}が特徴。体表の青い斑点が美しい。



ムラサキイガイ (イガイ科)
Mytilus galloprovincialis

貝殻の大きさは5cmほどで、岩のすき間などに集団でへばりつく。外来種。

アラレタマキビ (タマキビ科)
Echinolittorina radiata



貝殻は最大でも1cmほどで、磯場の干上がった岩のすきまなどに密集する。

クボガイ (ニシキウスガイ科)
Chlorostoma lischkei



貝殻の大きさは3cmほどで、背の低い円すい形。浅い岩場の岩かげに隠れて生息し、殻の表面に海藻が付着していることが多い。

ケガキ (イタボガキ科)
Saccostrea kegaki



貝殻の大きさは5cmほどで、波打ち際の岩場に張りつく。殻の表面には多数の筒状の突起がある。

オオコシダカガンガラ (ニシキウスガイ科)
Omphalius pfeifferi carpenteri



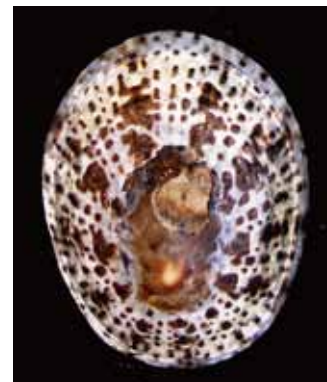
貝殻の大きさは4cmほどで、背の高い円すい形。クボガイと同じように、殻の表面に海藻が多く付着する。



インダタミ (ニシキウスガイ科)
Monodonta labio

貝殻の大きさは2cmほどで、名前の通り、殻の表面が石畳状。転石帯に多く、波打ち際には岩の上に出ていることが多い。

ベッコウガサ (ヨメガカサガイ科)
Cellana grata



傘のような円すい形の貝殻で、浅い岩場に張りつく。

ヨメガカサ (ヨメガカサガイ科)
Cellana toreuma



貝殻はベッコウガサよりも平たく、低い。波あたりの強い岩場で観察される。



ヒザラガイ (クサズリガイ科)
Acanthopleura japonica

貝殻の大きさは5cmほどで、岩に強く張りつく。殻の周りの肉帯には白いトゲが密集する。

観察してみよう! ⑥

愛きょうのある「マダコ」

磯の観察会などで出合える人気者と言えば、マダコです。浅い岩場の岩かげや岩穴によくかくれています。タコのなかまはとも頭がよく、高度な神経も発達しているので、体の色を周りの環境に合わせて擬態（カモフラージュ）するのも得意です。人が近くを泳いで通ると、一瞬だけビクッと動くので、岩場をよく観察していれば見つけることができます。また、好奇心がおう盛で、愛きょうもあり、山陰海岸学習館で水槽展示されているマダコは、お客さんが来ると、腕を伸ばして歓迎のあいさつをする時もあります。

春先から初夏の海中では、岩穴の天井面にブドウの房のような卵塊を産みつけて、大事に守り育てているマダコのメス（お母さん）に出合えます。卵がふ化した後、メス親は約1年の短い一生を終えます。



マダコ(マダコ科)
Octopus vulgaris



らんぽご
卵保護のようす



浦富海岸の海中にて…

クラゲのなかま（刺胞動物）

ミズクラゲ（ミズクラゲ科）
Aurelia aurita



乳白色で円盤状の傘をもち、その直径は最大で30cmに達する。山陰海岸では、春先から初夏に大量発生することがある。

タコクラゲ（タコクラゲ科）
Mastigias papua



傘の直径は最大で20cmほど。夏から秋にかけて観察される（観察されない年も多い）。やや褐色の傘に多くの白い斑点がある。



カミクラゲ（キタカミクラゲ科）
Spirocodon saltator



傘の高さは8cmほどで、主に春先に出合うことができる。多くの触手を持ち、それらのつけ根に赤い眼点がある。

エチゼンクラゲ（ピゼンクラゲ科）
Nemopilema nomurai



傘の直径が1mを超える大型のクラゲ。2009年頃までは多く観察されたが、最近ではあまり観察されていない。

ハナガサクラゲ（ハナガサクラゲ科）
Olindias formosa

傘の直径は最大で15cmほど。春から夏にかけて観察される。触手はとてもカラフルで、刺されるととても痛い。

かいそう
海藻

海藻は、赤色（紅藻 ●）・茶色（褐藻 ●）・緑色（緑藻 ●）の3つのなかまに分けることができます。

アナアオサ（アオサ科）
Ulva pertusa



一般に「アオサ」というとこの種類を指すことが多い。手ざわりはややかたい。春の海で繁茂する。

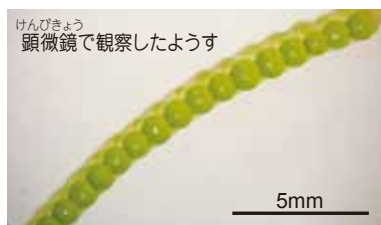
タマジユズモ（シオグサ科）
Chaetomorpha moniligera



アオノリのなかま（アオサ科）
Ulva sp.



春から夏にかけて繁茂する。このなかまは、食用となるものが多い。



浅い岩場でまとまって生育する。一見ただのひものように見えるが、よく観察するとツブツブが数珠状に連なっている。



ウミウチワ（アミジグサ科）
Padina arborescens

浅い岩場に繁茂する。名前の通り、うちわのような扇状の形をしている。ややかたい。

コラム① 日本文化に深い関わりのある「ミル」

夏は海藻が最も少ない季節です。そんな夏の海でよく見かけることのできる海藻のひとつは「ミル」です。体は太い円柱状をしており、規則的に二又に枝分かれすることで、扇状に広がります。また、フェルトのような手ざわりも大きな特徴のひとつです。



岩に生えるミル

一般的にはあまりなじみのないミルですが、実は日本文化に深く関係している海藻なのです。日本人は古くからミルに「海松」という漢字を当て、海松（ミル）を題材とした歌を詠んできました。現存する最古の和歌集である万葉集にも、ミルを詠ったものがあります。さらに、ミルの形をモチーフとした伝統的な紋様である「海松文（みるもん）」は、平安時代の貴族の衣装など



ミル（ミル科）
Codium fragile

にも使われてきました。また、ミルは平安時代から食用とされており、朝廷や伊勢神宮などに献納されていました。現在では、さっと湯がいたミルを酢味噌で食べるのが一般的なようですが、山陰海岸では食べる習慣がないようです。

ミルは緑色の海藻（緑藻）のなかまですが、シホナキサンチンという赤色系の色素を持つため、これが合わさることで他の緑藻よりもやや黒みがかった独特な深緑色をしています。古代の人はこの色を「海松色」とし、他の緑色と区別していました。海松色は、現在も使われている日本の伝統色のひとつです。

夏の海でミルを見かけた時には手に取り、日本人との深い関わりをぜひ感じてみてください。

（朝日新聞「生きもの通信 山陰海岸から（2014年8月30日掲載）」を一部改変）

マクサ(テングサ科)
Gelidium elegans



体は細く、羽状に枝分かれをする。夏には白くなったマクサが海岸によく打ち上がる。寒天やところてんの原料となる「テングサ」の代表種。

カゴメノリ(カヤモノリ科)
Hydroclathrus clathratus



春の浅い岩場に繁茂する。体は膜状で大小さまざまな穴がたくさんある。デコボコした丸い袋状。

ヒジキ(ホンダワラ科)
Sargassum fusiforme



浅い岩場に生育する。食べる時にヒジキは黒色をしているが、生きている姿は明るい茶色をしている。

ムカデノリ(ムカデノリ科)
Grateloupia asiatica



冬から春にかけて、浅い岩場に繁茂する。細長い葉からたくさんの枝が出てるので、名前の通り、ムカデのよう。海藻サラダに重宝される。

モズク(モズク科)
Nemacystus decipiens



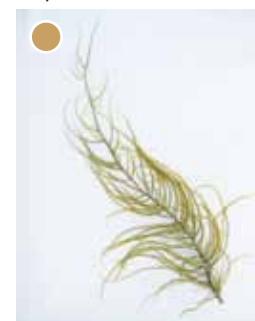
藻にくっつく、これが名前の由来。体は枝分かれが多く、ヌルヌルしている。春先に多い。

フサイワズタ(イワズタ科)
Caulerpa okamurae



小さなツブツブが房状に連なる。岩を匍うように生育する。沖縄の「海ぶどう」に近いなま。

クロモ(ナガマツモ科)
Papenfussiella kuromo



春先に繁茂する。全体に細かい毛があり、手ざわりはヌルヌルしている。日本海側では「坊主ごろし」と呼ばれ、食用になる。

観察してみよう! ⑦

知る人ぞ知る「ウミゾウメン」

初夏の浅い海で岩に垂れ下がる海藻、ウミゾウメン。円柱状でやわらかく、ヌルヌルしていて、引っぱるとゴムのように伸びます。古くから食用とされ、江戸時代には因幡(現在の鳥取県東部)を代表する名産品でした。今では市場にほとんど出回っていませんが、生や湯通ししたものに酢じょう油やポン酢をかけて食べると美味しいことは、地元でよく知られています。

同じくウミゾウメンと呼ばれるものに、アメフラシの卵があります。間違えて食べるとおなかを壊すことがあるので、注意が必要です。

(日本海新聞「何でも発見 たのしい観察108(2013年7月21日掲載)」を参照)



ヒラワツナギソウ(ワツナギソウ科)
Champia bifida

夏の浅い海の中で、青、緑、紫などカラフルな色合いを見せてくれる海藻。よく観察すると、葉の表面に輪状の模様がある。水から上げるとカラフルな色合いは一転し、うすい赤色になる。

セイヨウハバノリ (カヤモノリ科)
Petalonia fascia



冬から春にかけて繁茂する。根元から笹状の葉が数本伸びる。山陰地方では「藻葉」と呼ばれ、食用になる。

ツノマタ (スギノリ科)
Chondrus ocellatus



紅藻だが、暗紅色、黄緑色、黄色など色の変異が多い。体は厚みがあり、二又に数回枝分かれする。

ユナ (フジマツモ科)
Chondria crassicaulis

冬から春にかけて浅い岩場に生育する。独特の香りがある。山陰地方では「ソゾ」と呼ばれ、食用になる。

ベニモズク (コナハダ科)
Helminthocladia australis



夏の浅い岩場に生育。ヌルヌルとしてやわらかい。

フクリンアミジ (アミジグサ科)
Ruglopteryx okamurae



体は二又に枝分かかれし、扇状になる。色は緑褐色から黄褐色。



コラム② 磯の鳥? 「イソヒヨドリ」

海辺を歩いていると、「ヒーヨーピュルル…」という、ひときわ澄んで大きな声が響き渡ることがあります。このきれいな声の主は、イソヒヨドリです。声が聞こえたら、高い建物の端っこ、または宙に突き出した岩や木の枝先を探してみてください。ちょこんとした鳥のシルエットが見つかるかもしれません。

大きさはスズメより大きく、ハトよりも小さいくらいです。オスは青色と赤色のきれいな羽色で、メスの羽はまだら模様のある黒褐色をしています。

名前からするとイソヒヨドリはヒヨドリのなかまのようですが、そうではなくツグミのなかまです。ツグミのなかまの多くはオスの声がきれいで、さ



えずるのが上手です。イソヒヨドリは、オスだけでなくメスもしばしばさえずりに似た声で鳴きます。春先から初夏にかけての繁殖期にはつがいになわばりを持ち、海岸の岩の割れ目や岩棚、または民家やビルの隙間に枯草などで巣をつくります。

イソヒヨドリは名前に「イソ=磯」と付くように、以前はおもに海辺に生息しており、他の場所での観察記録はまれでした。しかし、20年ほど前から海からやや離れた市街地でも繁殖が確認されるようになりました。今では、内陸の町中でも普通に見られる鳥として定着しています。

もし澄んだ鳥の声が聞こえたら、ぜひ声の主を探してみてください。海辺で見かけるイソヒヨドリは、ふだんから皆さんの身近にいる鳥なのです。

(朝日新聞「生きもの通信 山陰海岸から(2014年5月20日掲載)」を一部改変)

